

295. 守山市古高町所在の 前方後方型周溝墓について

1. はじめに

筆者は、平成7年5月から9月にかけて、守山市古高町字塚之越258番地他、約2,800㎡において、開発に先立って発掘調査を担当した。

塚之越遺跡は、今回までに8次の調査を行っており、これまでの調査で、縄文時代中期末の土器や石器、弥生時代中期末から古墳時代初頭の方形周溝墓群、平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡が検出されている。過去の調査で検出された方形周溝墓群は、西側に隣接して存在する、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて大規模化する集落遺跡である下長遺跡の墓域として考えられている。また、この墓群は東からのびる微高地上に、約200m、幅40mの範囲に広がっており、今回の調査区もこの中に含まれる。

2. 塚之越遺跡第9次調査の概要

遺構の検出は重機により、南東から順に行った。遺構面は耕作土直下であり、後世の削平をうけ、鋤跡を多数検出している。検出している際に前方後方型周溝墓を発見したため、遺構の重要性から、全容を解明するために平面検出及び、一部掘削という方法を取り、実質調査面積は約1,100㎡となった。以下、各遺構ごと

に述べる。

溝1は、地面から南へ流れており、前方後方型周溝墓の前方部前面によどみを作り、方形周溝墓1の一部を切っている。時期は出土した土器から、古墳時代後期後半（TK209）の年代が与えられる。（図4-14、15）。

溝2は、前方後方型周溝墓と方形周溝墓1の間をめぐって流れており、東側から離れた調査地の方向へ向っている。時期は出土した土器から弥生時代後期末の年代が考えられる。しかし、弥生時代中期末の土器も出土していることから、周辺に弥生時代中期末の遺構があることはまちがいないであろう（図4-12、13）。

溝3は、前方後方形周溝墓の周溝東側の外側のラインを切って流れている。そのため、周溝の外側のラインは不明であるが、反対側の周溝のラインから対角的に復元することが可能である。時期は不明である。

方形周溝墓1は、南側が調査区の外へ広がっているため正確な規模はわからないが、東西方向で6.3mあり^①、深さは30cmでU字形の溝をめぐらす。時期は、周溝の底より出土した土器から、弥生時代後期後半の年代が与えられる（図4-8～10）。

方形周溝墓2は、前方後方型周溝墓に切られている（図3-B-B'）。規模は東西9.2m、南北8mで、深さ70cmのV字形の溝をめぐらし、北側を一部陸橋状に掘り残す。この遺構は当初の開発対象地外であるた

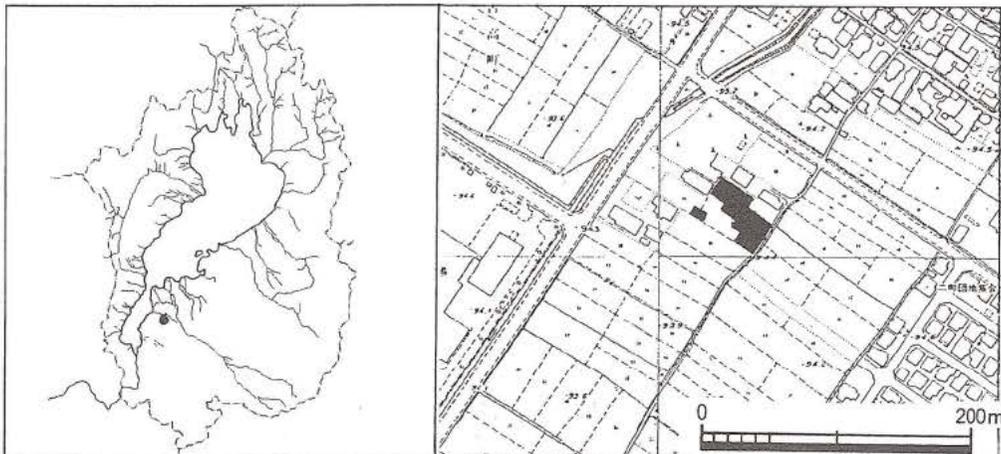


図1 調査位地図

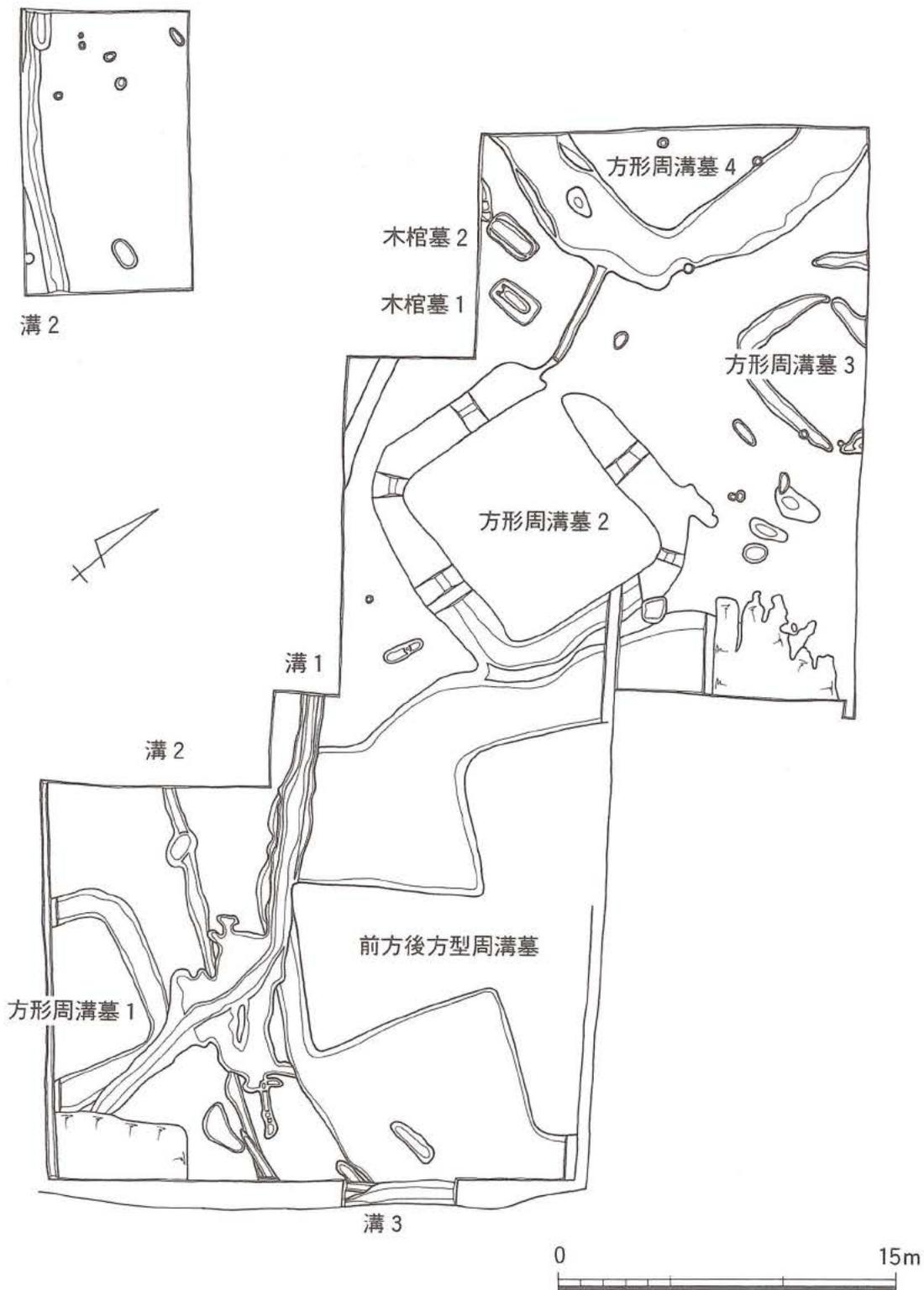
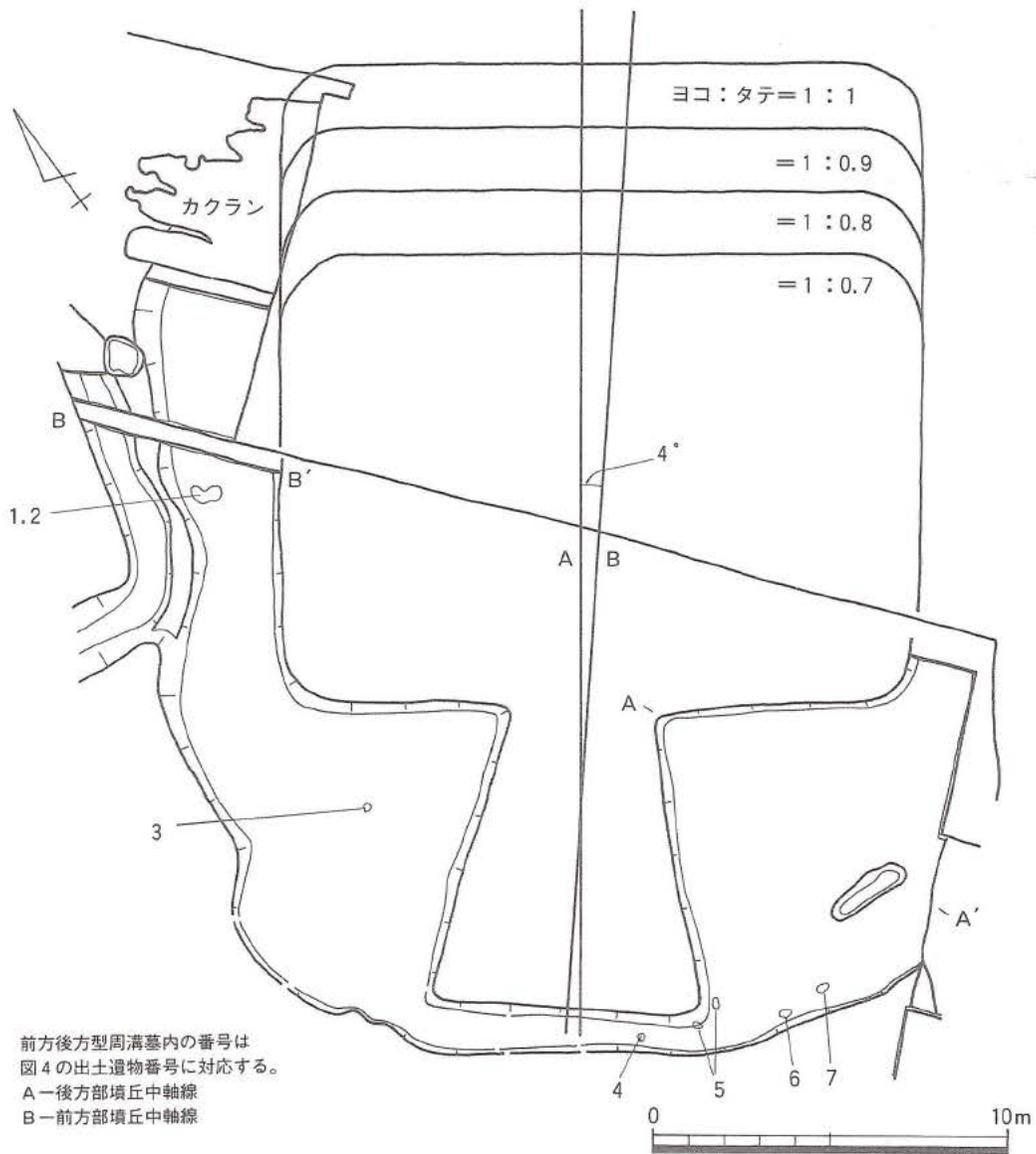
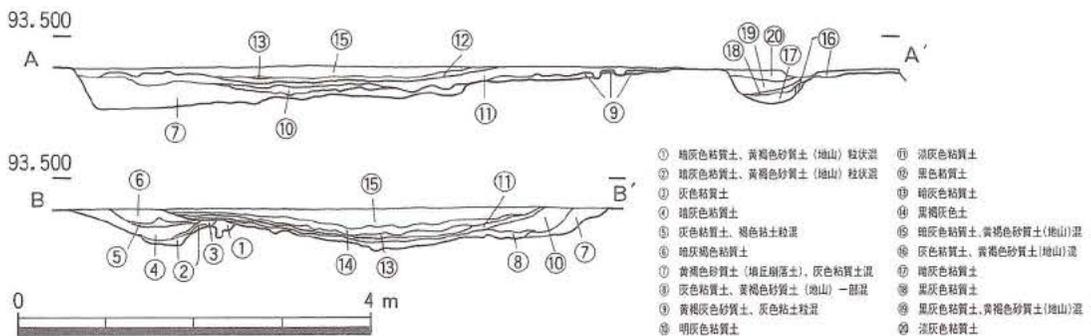


图2 塚之越遺跡9次調査遺構図



前方後方型周溝墓内の番号は
図4の出土遺物番号に対応する。
A—後方部墳丘中軸線
B—前方部墳丘中軸線



- ① 暗灰色粘質土、黄褐色砂質土(地山)粒状混
- ② 暗灰色粘質土、黄褐色砂質土(地山)粒状混
- ③ 灰色粘質土
- ④ 暗灰色粘質土
- ⑤ 灰色粘質土、褐色粘土粒混
- ⑥ 暗灰色粘質土
- ⑦ 黄褐色砂質土(埴丘崩落土)、灰色粘質土混
- ⑧ 灰色粘質土、黄褐色砂質土(地山)一部混
- ⑨ 黄褐色砂質土、灰色粘土粒混
- ⑩ 明灰色粘質土
- ⑪ 暗灰色粘質土
- ⑫ 黑色粘質土
- ⑬ 暗灰色粘質土
- ⑭ 黄褐色灰色土
- ⑮ 暗灰色粘質土、黄褐色砂質土(地山)混
- ⑯ 灰色粘質土、黄褐色砂質土(地山)混
- ⑰ 暗灰色粘質土
- ⑱ 黒灰色粘質土
- ⑲ 黒灰色粘質土、黄褐色砂質土(地山)混
- ⑳ 暗灰色粘質土

図3 前方後方型周溝墓墳丘規模推定図及び断面図

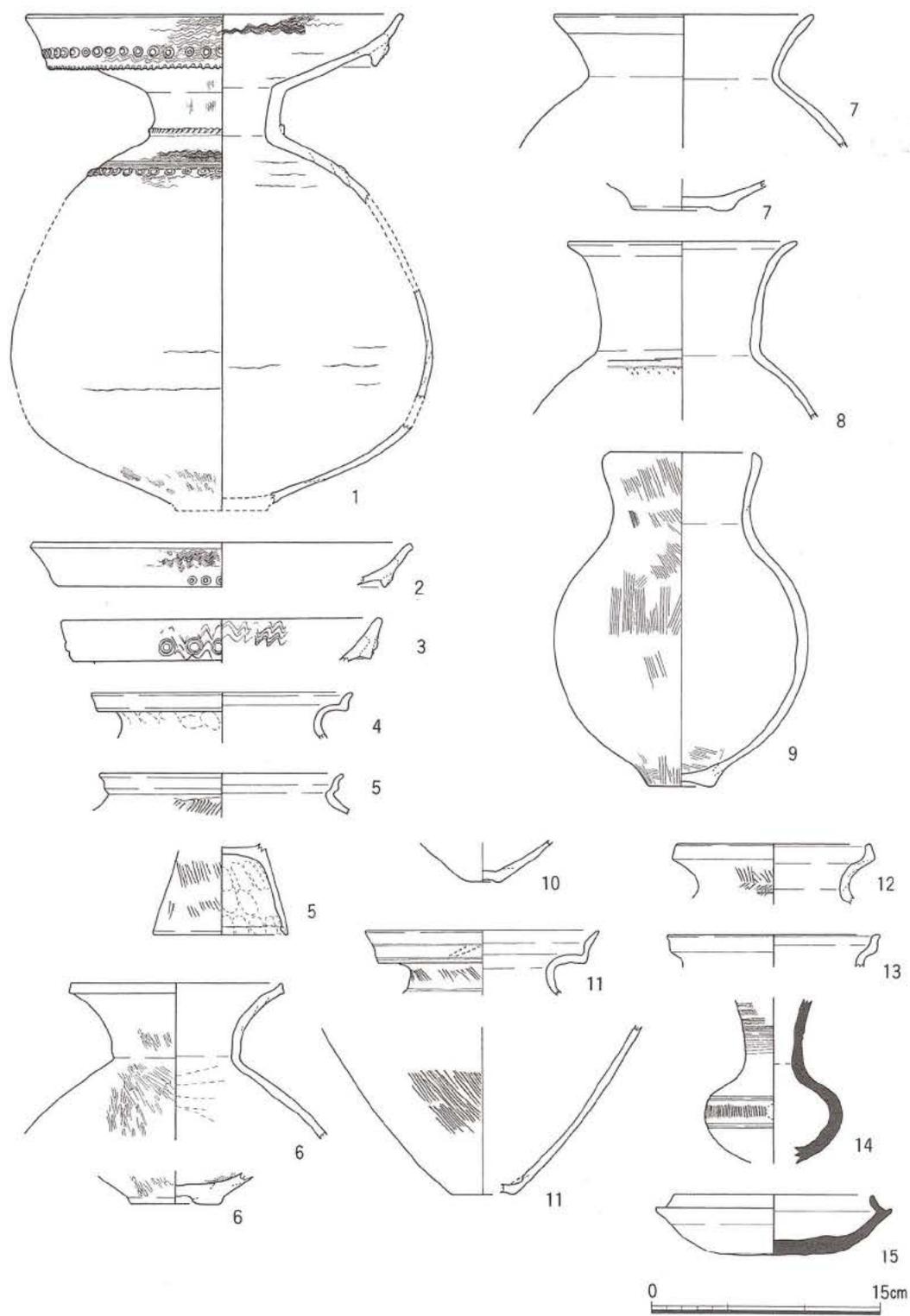


图4 出土遺物実測図

め一部の掘削にとどめた。時期は遺物が出土しなかったために不明であるが、ほぼ同軸角をしている方形周溝墓1、4より弥生時代後期後半の土器を出土していることから同時期であろう。

方形周溝墓3は、小型で、南北4.1m、東西5.5mで深さは20cmのU字形の溝をめぐらし、四隅を陸橋状に彫り残す。時期は遺物が出土しなかったため不明ではあるが、方形周溝墓1、4との同軸角性から、弥生時代後期後半の年代が与えられる。

方形周溝墓4は、調査区の北西側へ広がっていくため正確な規模は不明である。溝の深さは40cmであり、周溝の外側はなだらかに掘られているものの、墳丘側は垂直に近く立ち上がる。時期は出土した土器より弥生時代後期後半の年代が与えられる(図4-11)。

方形周溝墓は以上4基検出したが、いずれも弥生時代後期後半のものであった。周溝内埋葬はいずれの方形周溝墓でも確認出来なかった。中でも注目できるのは方形周溝墓2と4で、細い溝でつながっていることからこれら2基は、なんらかの関連性があると考えられる。

本棺墓1、2は、埋土の断面観察の結果、一部に木棺痕跡を確認した。出土遺物は両者からみられなかったが、2基ともに方形周溝墓の軸角にほぼ対応することから、方形周溝墓群と同時期の年代が与えられる。

前方後方型周溝墓は、溝1と3により周溝の一部を切られている。周溝は前方部前面の深さは30cmでありU字形に掘り込まれる。周溝全体から見ると深い所でも50cmほどしか残存していなかった。また周溝掘削の特徴であるが、周溝の外側は非常に浅く掘削され、前方部の両側面はゆるやかに掘削され、後方部に関しては垂直に近く立ち上がることが指摘出来る。また方形周溝墓2との切り合い関係は、断面観察の結果、明瞭に区別出来、方形周溝墓2を切って築造されている(図3-B-B')。また周溝内に土壌を検出したが、掘り込み面が、周溝の掘削前か、周溝の埋没過程か、周溝の埋没後か判別出来なかったが、平面精査の際はまったく存在がわからなかったため、前2者の可能性が非常に高く前方後方型周溝墓掘削後および、それ以降のものとして、規模的にも周溝内埋葬の可能性が高く、ここでは周溝内埋葬とする。

前方後方型周溝墓の規模に関しては、周溝の外側のラインが、南側において溝3に切られ、なおかつ調査区外へ広がっていくこと、そして、北側ではかく乱されており判然としなない。また墳丘自体も調査区外へ広がっていくことから、規模に関しては部分的にしか判明していない。わかっている範囲での規模は、前方部前面の幅は7.5m、くびれ部の幅4m、前方部長8.6m、後方部の幅18mである。また、前方部前面の辺と後方

部前面の辺が平行せず、前方部墳丘中軸線と後方部墳丘中軸線が4°振れていることがわかり、前方部が後方部に対して西へかたむいて築造されていることが判明した。

ここで後方部の長さを推定してみる。後方部墳丘中軸線に沿って後方部幅を1として考え後方部長を1と考えると、かく乱の向い側へ出ることとなりそれはありえない。また横：縦の比率を1：0.9にすることは周溝の幅からは考えにくい。したがって横：縦の比率は1：0.8及び1：0.7の可能性が高い。

ここで2つの仮説を立てる。1つは縦：横の比率が1：0.8と1：0.7とする。もう1つは後方部長が前方部長の1.5倍とする。

仮説1、横：縦=1：0.8の場合では、 $18m \times 8 = 14.4m$ となり、前方部長8.6mをたすと23.0mとなる。横：縦=1：0.7の場合では、 $18m \times 7 = 12.6m$ となり、前方部長8.6mをたすと21.2mとなる。

仮説2、後方部長が前方部長の1.5倍の場合では、前方部長 $8.6m \times 1.5m = 12.9m$ となり前方部長8.6mをたすと21.5mとなる。

上記の仮説から判断すると後方部の幅を1とし、後方部長を0.7とした場合の全長21.2mと、仮説2で後方部長が前方部長の1.5倍の際の値21.5mと非常に似た数値が割り出される。したがってこの仮説にもとづき、前方後方型周溝墓の全長は約21mとする。

前方後方型周溝墓の記述では最後となるが、周溝埋土の状況で興味深い結果が出た。それは、後方部側の埋土の墳丘側に墳丘の崩落土と思われる土が厚く堆積していたが、前方部側の埋土ではそれがほとんど確認出来なかった^⑧。このことから後方部にはかりの盛土があり、前方部にはほとんど盛土がなかったと考えられる。したがって、前方部は道として、後方部は埋葬部としての使い分けが行なわれていた可能性が非常に高い。時期は周溝の底にはりついた遺物が少なく、加飾二重口縁壺、埋没過程の遺物から、弥生時代後期終末(庄内伴行期新段階)のものと考えられる(図4-1~7)。

3. 出土遺物の検討

前方後方型周溝墓出土時(図4-1~7)

土器1は、後方部西側の周溝の底にはりつく状況でまとまって出土した。垂下加飾二重口縁壺である。復元実測ではあるが、胴部下半に最大腹径を持つ。肩部に櫛描波状文を施した後その上に櫛描直線文を施し、円形浮文を飾り竹管状の工具による刺突を施す。頸部と体部の接合部には貼り付け突帯を巡らし、刻目を施す。口縁部は一度擬口縁を作り、上方と下方へ口縁部を外反、垂下させることによって二重口縁を形成して

いる。口縁部外面には波状文を施し、その後円形浮文で飾り、竹管状の工具により刺突を施す。垂下させた口縁部の下端には刻目を施す。口縁部内面にも波状文を施す。口径24.2cm。底部はまとまった状況において出土したにもかかわらず存在しないことから焼盛後に穿孔された可能性が高い。器高は推定32.6cm。土器2も土器1と同じ場所で出土したが、口縁部の破片のみであった。垂下加飾二重口縁壺であり、口縁部は一度擬口縁を作り、上方と下方へ外反、垂下させることによって口縁部を形成している。口縁部外面は円形浮文で飾り、竹管状の工具により刺突を施す。上方には細かな波状文を2条施す。口径24.5cm。土器3は前方部西側の埋土中より出土した。加飾二重口縁壺の口縁部で、一度擬口縁を作りその外側に粘土帯を貼り付けることによって口縁部を形成している。外面には大きめの円形浮文で飾り、その上から竹管状の工具で刺突する。口縁部内面にも波状文を施す。口径20.6cm。土器4は前方部前面の周溝内の埋土から出土している。受口状口縁甕の口縁部片である。口径15.9cm。土器5は前方部東側コーナー部より周溝底から浮いた状態で出土している。S字状口縁付甕C類の口縁部及び脚部である。体部は細片となり接合が不可能でありもともとは完形品であったと考えられる。脚部は脚端を内側に折り曲げ外面は荒い刷毛目調整を施し、内面には指頭圧痕がみられる。口径15.8cm。脚径8.9cm。土器6は前方部周溝の外側から2cmほど浮いた状態で出土している。体部は細片となり接合が不可能であったがもともとは完形品である。広口壺である。調整は縦方向のヘラミガキを施し、内面はオデ調整を施す。口径13.8cm。底径6.1cm。土器7は土器6と同様に周溝底より2cmほど浮いた状態で出土している。体部は細片のため接合が不可能であったが、もともとは完形品である。広口壺で口縁部外面に一条の沈線を引く。調整は摩滅のため内外面とも不明である。口径16.8cm。底径6.2cm。

方形周溝墓1出土土器(図4-8~10)

土器8は北側周溝底より出土した。広口壺であり、肩部には直接文と列点文を施す。他の調整は摩滅のため不明である。口径14.9cm。土器9は土器8と同じ場所から出土した。退化長頸壺であり、体部の調整は内外面ともに刷毛目調整を施す。口径9.4cm。器高2.2cm。土器10は周溝内の埋土より出土した。壺の底部で底径は2.4cm。

方形周溝墓4出土土器(図4-11)

土器11は東側の周溝の底にはりついた状態で出土した。受口状口縁壺の口縁と底部から体部にかけての破片である。頸部は刷毛目調整を行なった後に直線文を施す。口縁部外面は沈線を2条巡らした間に、右上りの列点文を施す。体部は荒い刷毛目調整を施す。口径

15cm。

溝2出土土器(図4-12、13)

土器には受口状口縁甕の口縁部である。調整は頸部に刷毛目調整を施した後直線文を施す。口径12.6cm。土器13も受口状口縁甕の口縁部である。口径13.8cm。

溝1出土土器(図4-14、15)

土器14は甕の破片である。土器15は杯身でありTK209型式に比定出来、底部は未調整である。

4. まとめ

塚之越遺跡では、弥生時代後期後半に方形周溝墓、木棺墓が築造され、その後終末期に前方後方型周溝墓が築造される。このことは共同墓域の中に前方後方型周溝墓が築造され、墓域の中では自立性をもつものの集団墓から隔絶した首長墓とはいいがたい。また出土遺物の中に東海地域の影響をうけたものがある可能性はある。しかしながら、湖南地域には前方後方型周溝墓17基が弥生時代後期前半から古墳時代初頭にかけて集中して築造されていることは、湖南にその出自が求められる可能性がある。しかし、東海地域との土器の併行関係が整理されていない現状においては、両地域の交流のもとに成立したと考えるのが妥当である。

近江全体では、湖北に円形周溝墓が3基、前方後方型周溝墓が2基、また、北近江には方形台状墓の築造が確認されており、他地域とのつながりも考えに入れておかねばならないであろう。

今後各地域ごとに細かく検討することが重要である。
(佐々木 勝)

註

- ①方形周溝墓や前方後方型周溝墓などは、上部の削平率の違いなどを考え合わせて、本来の築造規画を表わす下端で規模を表現するのが合理的と考えられるが、ここではわかり易くするために上端での規模を記述する。
- ②千葉県所在の高部30号墳、32号墳の両前方後方墳は後方に多量の盛土を施し、前方部はあまり盛っていないことから類似性が認められるのではないだろうか。

参考・引用文献

1. 赤塚次郎「東海系のトレース」『古代文化』44-6、1992
2. 赤塚次郎「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7、1995
3. 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』37、1977
4. 近藤義郎「前方部とは何か」『古代吉備』第21集、1999
5. 佐伯英樹「前方後方形周溝墓」『滋賀考古』第21号、1999
6. 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3、1979